



Data 2023-43

監督・脚本：ジャン＝ピエール&リ
ュック・ダルデンヌ

出演：パブロ・シルズ/ジョエリ
ー・ムブドゥ/アウバン・
ウカイ/ティヒメン・フーフ
アールツ/シエルロット・
デ・プライネ

👁️👁️ みどころ

ヨーロッパ各国における移民、難民問題は日本の比ではなく、超深刻！冒頭に見るアフリカ系の女の子ロキタは、ビザを取得すべく、懸命に「トリは弟だ！」と主張していたが・・・。

ダルデンヌ兄弟の痛烈な社会問題提起作は、全編、ドラッグの運び屋をしているトリとロキタの嘘ばかり。しかし、この2人をこき使う大人たちのズル賢さはそれ以上だから、こんな世の中は、どこかヘン！

そんな本作が、なぜ“最も純粋なサスペンス映画”に？それは、あっと驚くラストの“大脱走”と、その後の顛末を見ながらしっかり考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ダルデンヌ兄弟が痛烈な社会問題提起作を！■□■

本作のチラシには「ダルデンヌ兄弟作品史上、最も純粋なサスペンス映画。」の文字が躍っている。ベルギーの映画監督であるジャン＝ピエール・ダルデンヌ&リュック・ダルデンヌといえば、『ロゼッタ』（99年）、『ある子供』（05年）でカンヌ国際映画祭パルムドール賞（最高賞）を2度も受賞するなど、数々の賞を受賞している名匠として知られている。

そんな彼らの最新作である本作も、カンヌ国際映画祭75周年記念大賞を受賞！そして、そんな目で再度チラシを見ると、そこには「各年代に傑作を生みだしてきたダルデンヌ兄弟が、2020年代にキャリア35年にして到達した、シンプルかつ強靱な傑作！！」と書かれている。こりゃ必見！

■□■「トリとロキタ」は日本ならさしづめ「太郎と花子」？■□■

タイトルだけでは何の映画かサッパリわからないが、「トリとロキタ」は日本風に読み直せば、さしづめ「太郎と花子」・・・？

本作冒頭、お世辞にも美人とは言えない大柄の黒人系の少女ロキタ（ジョエリー・ムブンドゥ）がクローズアップで登場し、ビザ申請の面談で不法滞在を取り調べられている風景が映し出される。彼女が自分の弟だと主張するのがトリ（パブロ・シルズ）だが、12歳の彼は保護施設での滞在が許可されているらしい。“何でも説明調”の邦画と違い、本作ではそんな2人の履歴は語られないが、解説によると12歳のトリはベナンから迫害を逃れてきた保護者のいない亡命者。一方、16歳のロキタはカメルーンにいる家族へ仕送りをするために密航してきたという設定らしい。

■□■本作監督のきっかけは、ある新聞記事から！■□■

ダルデンヌ兄弟が本作を監督するきっかけになったのは、1人でベルギーにやってきた未成年者たちが行方不明になるという記事を読んだため。「ベルギーから英国へ行くとして送り返されただけでなく、異常な状況下で失踪している。彼らは犯罪の世界に潜り込んでしまったのだ。それは許されることではない」とリュックは怒りをあらわにしながら語っている。また、移民の子供たちが迫害され、搾取され、尊厳を踏みにじられている状況に対して「憤りを感じ、この作品を通して告発したかった」とも語っている。日本ではあまり表面に出ないものの、ヨーロッパ各地ではそんな移民、難民問題がごまんとあるわけだ。なるほど、なるほど……。

■□■なぜドラッグの運び屋を？トリとロキタの願いは？■□■

ロキタの願いはただ1つ。ビザを取得した上で家政婦になり、看護院に入っている弟のようなトリと一緒に暮らすこと。それだけだ。そのため、今は一生懸命トリの姉としてビザを取得するべく面接の練習をしているのだが、これが意外に難しい。どう突っ込まれるかわからないから、トリからはひっかけ質問を含めて2人でしっかり予行演習をしたのに、その結果は……？

日本は麻薬天国ではないが、法治国家であるはずのヨーロッパ各国ではドラッグの密売が盛んだ。そんなベルギーで、本作の一方の主人公としてたびたび登場する悪人が、イタリア料理店のシェフとして働いている男ベティム（アウバン・ウカイ）。彼は子供の方がドラッグの運び屋としては安心だと考えていたため、ロキタを窓口としてトリを運び屋として便利に使っていたが、2人はいつまでもそんなことをしていいの？

本作中盤は、16歳の女の子ロキタと12歳の男の子トリのそんな“あがき”ぶりをしっかり“目撃”したい。

■□■嘘をつくのはダメ！！そんなキレイ事が通じるの？■□■

嘘についてはダメ。なぜなら、嘘をつくのは悪いことだから。日本では子供にそう教えるが、本作では、冒頭の“リハーサル風景”からして、いかに嘘についてビザを取得するかに励んでいるから、根本的な価値観の違いが鮮明だ。ロキタもトリも本心ではドラッグの密売を嫌がっているが、今はそれしか生きる道がないから、その面でも、あちこちで嘘をつきながら器用に世間を渡っていた。その姿を見て、“利口”だというのか、それとも“不

憫”だというのは他人の勝手だが、ダルデンヌ兄弟がそれをどのように浮かび上がらせたいのかは、本作の展開を見ているとよくわかる。

■□■命綱の携帯からSIMカードを抜かれてしまうと？■□■

そんな2人にとっては携帯での連絡が命綱だが、ロキタは今、「偽造ビザを用意してやる」というベティムの誘いに乗って怪しげな“新しい仕事”に就いていた。それは、大麻の栽培を行う仕事だったからヤバイ。その上、その場所が外部の者に特定されないよう、ロキタの携帯のSIMカードは、ベティムによって抜き取られてしまったから、アレレ。

ロキタには迷路のような建物の中に一応“個室”が与えられたが、食事は冷凍食品のみ。しかも、一週間分がまとめて運ばれてくるという条件だから、これは“半監禁状態”だ。そんな状況下、携帯電話でトリとの連絡を唯一のよりどころとして嫌な仕事に励んでいたロキタが、こんな“半監禁状態”でトリと話せなくなれば、ロキタはパニック状態になってしまうのでは？

■□■2人の“大脱走”は成功！いやいや、結局は・・・？■□■

本作後半は、半監禁状態のロキタをトリが敢然と救い出す、あっと驚く冒険物語になるので、それに注目！“たかが12歳のガキ”とバカにしてはダメ。そこでは、トリの頭の良さはもとより、小柄なトリになればこそその敏捷性や行動力が発揮されるので、それに注目！しかし、所詮やっぱり12歳の子供のやること・・・？トリの行動がベティムに見つかってしまうと・・・。

ハリウッドのオールスターが共演した『大脱走』（63年）では、前半に見た、大脱出のための大規模なトンネル掘り作業の壮大さに驚かされたが、結果は残念ながら・・・。それと同じように（？）、本作でも12歳のトリの獅子奮迅の活躍にもかかわらず、ロキタ救出作戦がベティムに見つかってしまうと、万事休す。さあ、トリとロキタの大脱走は？作り物の映画なら、その展開と結末をハッピーエンドにできるはずだが、社会問題としての現実を見据えると、その展開と結末は自ずと明らかだろう。しかして、それはあなた自身の目でしっかりと。

2023（令和5）年4月11日記